

浮舟入水の後

——源氏物語終末の思想——

加 納 重 文

小稿は、平成十七年九月一〇日に、羽衣学園大学において催された中古文学会関西西部会における発表原稿として作成したものであるが、実際の発表にあたっては、小稿を朗読するような形では、行わなかった。口頭発表の遺漏を補う意味で、ここに公表の許可をいただいた。

一 浮舟の入水

あらためて確認しなくてもとも思いますが、やはり浮舟巻終末の浮舟入水辺の記述から入りたいと思います。庇護者である薫と恋愛者である匂宮と、どちらかに一方的に感情を寄せることが出来ない浮舟の逡巡は、浮舟巻末に、かなり丁寧に記述されております。

なほ、我を、宮に心寄せたてまつりたると思ひて、この人々の言ふ、いと恥づかしく、心には、いづれとも思はず、たゞ、夢のやうにあきれて、いみじく炒られ給ふをば、などかくしもとばかり思へど、頼み聞えて、年頃になりぬる人を、いまはともて離れむとおもはぬによりこそ、かくいみじと物を思ひみだるれ。よからぬ事もいできたらむとき

と、つくづくと思ひ居たり。

(浮舟・262)

ここに明記されているように、浮舟には、「頼み聞えて、年頃になりぬる」薫から離れるという気持は全く無いが、「いみじく炒られ給ふ」匂宮にこよなく惹かれる心中も確かであり、「いづれとも思はず」というほかない心境を、浮舟は、正確に自覚しております。こういう状態にあつて、常陸国での右近の姉の場合のような事件が起きる可能性に恐々としながら、それを未然に回避する道として、

一方一方につけて、いと、うたてある事は出で来なん。わが身一つの亡くなりなんのみこそ、目安からめ。

(浮舟・265)

と思惟するにいたる道筋は、ごく自然であります。こうして、都育ちの姫君であれば、思いも寄らない「自殺」の発想が、浮舟の思念になるという記述の経過にも、無理はありません。そして、出会うこと無く都に返した匂宮に対しては、「一言をだに、聞えずなりにしは、なほ今ひとへ勝りていみじ」と思つて、

からをだに憂き世の中にとゞめずはいづこをはかと君も恨みん

最後の心情を伝え、ただ一人恋しく思う母親には、「親に先立ちなん罪、失ひ給へ」と祈つて、

鐘の音の絶ゆる響きに音をそへて我が世尽きぬと君に伝へよ

と、遺言を残します。浮舟が、死への道に進んで行く道筋は、きわめて自然に丁寧に記述されております。源氏物語がこの浮舟巻で終わっていたなら、浮舟が宇治川に身を投げる瞬間の描写などは無くても、浮舟の消滅への描写はきわめて周到になされていたと、誰にも感じさせるものであったと思います。

さきほど、「源氏物語がこの浮舟巻で終わっていたなら」と述べましたけれど、これにつきましては、私の本日の報告の趣旨が、その認識結果によって変わってくるということではありませんので、触れることが必須の問題ではありませんけ

れど、述べておきたいと思います。現在の学界の把握の趨勢がどちらにあるか、正確に認識はしていませんが、源氏物語が、浮舟巻で終わらずに、蜻蛉巻あるいは手習・夢浮橋巻への展開が、当初からの予定の構想であったとしたら、蜻蛉巻後半における、薫と匂宮の女一宮を中心とする宮廷物語、あるいは、横河僧都の妹尼の住む比叡山西麓の山荘における浮舟の出家、それらを導く前提として、浮舟の消滅（入水）の物語が存在したということになります。しかし、この「前提」とする認識の観点から見ると、蜻蛉巻後半の宮廷生活とは、関連する内容は稀薄であります。手習巻以後の浮舟の出家は、浮舟の入水から展開した物語と把握される内容はあると判断はされます。

結論的に申してはなはだ恐縮ですが、浮舟の消滅（入水）の物語は、質的には、その後に展開していく質よりも、その以前に密着した物語と把握される性格の方が、はるかに鮮明と思います。これまた、現在の、多分常識的な把握を敷衍するだけであろうと思いますが、述べておきたいと思います。薫の接近を煩わしく思う中君から伝えられて、浮舟の存在が知られたのは、誰もが知るところでありますし、薫の中君への接近も、亡き大君への思慕から発していますので、浮舟の物語は、宇治十帖初期の薫と大君の物語を、なんらかの意味で継承する物語であることは、明瞭に知られると思います。そして、宇治十帖初期の薫と大君の物語が、匂と中君の物語と対照して、精神の愛の可能性を求めて彷徨する物語であったことも、自明かと思えます。それはさらに遡って、若菜下巻における「紫上の絶望」と称された、女性における真実の愛情の問題、その新たな問いかけとしてある物語であったことも自明と言って良いのではないのでしょうか。

再度整理して申します。宇治十帖の物語が、橋姫巻において、どちらを甲乙とも区別し難い二人の貴公子、薫と匂宮を、物語の主人公と設定して始められた時、なんら遜色無い二人の貴公子が、女性に対する精神性と肉体性にいう点においてのみ、顕著な人格の相違を持つと設定されて始められた時、その物語が語られる主題的な意味が、「紫上の絶望」の再度の問いかけであったことは、明瞭であったということでありませぬ。紫式部の作家としての思いは、薫と大君において、精

神の愛・純粹の愛あるいは絶対不変の愛が結局のところ語られる物語になって欲しかったと思います。匂宮の愛が、愛とも評し難い、虚妄の好奇心でしかないことが語られる物語になって欲しかったのだと思います。けれども、周知の通り、むしろ、強姦に近い形で成立した肉体の結びつきの愛の方が、結局、それなりに目安い男女の結びつきとして語られることになった時、作家・紫式部の思いは、はなはだ不本意に感じるものであったと思います。不本意ではあるけれど、男女の結びつきの根幹は、結局は、肉体の結びつきから目を反らしては存在しない、そのことも、あらためて認識したと思います。

宇治十帖の後半の物語である浮舟の物語において、今度は、薫と匂宮は、同じ一人の女君浮舟にかかわる二人の貴公子として語られます。どちらも浮舟とは肉体的に結ばれています。男女の結びつきの根幹が、結局、肉体の結びつきであることを認識した上で、この二人の貴公子の浮舟への関わり方が、語られる訳でありますけれども、薫における「庇護者」としての関わり、匂宮における「恋愛者」としての関わりが終始語り続けられるということは、結局のところ、どちらの関わり方が、真実の愛の姿勢なのか、いや、所詮愛の問題とも言えないかもしれないけれど、どちらの姿勢が、浮舟にとって価値ある関わり方であるのか、そういう新たな問いかけであったと考えて良いかと思えます。

しかし、あらためて考えてみますに、「庇護者」であるか「恋愛者」であるかは、女にかかわろうとする男の姿勢として、両極端であると同時に、すべての男の関わり方が、言ってみればこの座標軸のどこかに位置すると言ってよい、基本的な姿勢でありました。要するに、作家・紫式部は、男女の結びつきの根幹が、結局、肉体の結びつきから目を反らしては存在しないことを認識したうえで、女が選ぶべき男の価値は、庇護にあるのか恋愛にあるのか、そのことを、物語に語られる最後の問題として、問いかけざるを得なかったということでありました。それが、冒頭に述べましたように、物語の終末近くにおける浮舟の自覚として語られるように、どちらが選ばれるべき価値かという問いかけには、回答不能とする

しか無いという状態になりました。回答は不能だけれど、回答を目前に迫られるし、目前の回答を躊躇っているうちに、取り返しのつかないどんな事件が起きるか、不測の状態にもなっている。この状態で、自分の存在を消滅させるしか、緊張関係を緩和する方法は無い。浮舟のここに導かれる心情が、委細を尽くしてと言ってよいほどに、きわめて自然に語られていたことは、先述した通りであります。

このように辿ってきますと、浮舟巻終末における浮舟の消滅（入水）は、新たな物語の起点と言うよりも、追求されてきた課題の不本意な回答と考えるしか無いというのが、私の認識であります。これは、学界における常識的な認識であり、私がことあらためて申すべきほどのものでもないとも認識しておりますが、いかがでありますでしょうか。

二 薫と匂宮

浮舟の消滅（入水）で、物語が幕を下ろしたとすると、この後に語られている、蜻蛉巻以下の物語は、何を語ろうとして、語られているのでありましようか。実は、本日の私の報告は、このことについての私見を述べようとしているものであります。その私見の前提として、暫く、蜻蛉巻以後の登場人物の人物像について、順次整理していきたいと思います。

浮舟が宇治川に入水したと思われた時、薫は、母入道宮の病氣祈願のために、石山寺に参籠中であって、状況を知るのにやや時間がかかりました。事柄が伝えられた時に、薫は、鬼なども棲むかと思われるような怪しい場所に浮舟を住ませ、匂宮が通うような隙を見せたのも、結局のところは自分の油断であったと、反省しています。

わが、たゆく、世づかぬ心のみ、くやしく、御胸いたく思え給ふ。

(蜻蛉・288)

そして、浮舟の容姿の好ましかったことなども思い出して、このような物思いをするというのも、若くから出家を志しながらもいつまでも現世にかかづらっている、自分の見苦しさに思いをいたし、ひたすら仏道に励む生活になっていると、

物語は述べております。嘆きのあまりには、今は、浮舟も失った宇治の地を訪ねて、右近との対話に浮舟の最後の様子などを聞いたりして、浮舟の匂宮との交渉を確認しても、

宮を、珍しくあはれとおもひ聞えても、我が方を、さすがにおろかに思はざりける程に、いとあきらむる所なく、はかなげなりし心にて、この水の近きを頼りにて、思ひ寄るなりけむかし。

(蜻蛉・304)

一方的に匂宮との感情におぼれることなく、薫の感情を思うあまり、ついに入水に思い至った浮舟の心情を思いやり、自らの心のおこたりを詫びる心境になっています。そして、せめて「猶、このゆかりこそ、面だたしかりけれと思ひ知るばかり、用意は、必ず見すべきこと」と、浮舟の縁者への配慮まで口にし、浮舟の四十九日のことも、ことさら念入りに努めたりしています。

一方の匂宮も、浮舟の身の変事を耳にしては、二、三日は意識も無く、命にもかかわりそうなくらいに落胆の数日を過ごしていますが、快復とともに宇治から侍従を呼び寄せて、浮舟の最後の模様を聞いたり、浮舟の四十九日には、右近に託して、浮舟の菩提を弔うべく、努めています。

二人の人の御心のうち、古りず悲しく、あやにくなりし、御思ひの盛りに、かき絶えては、いとみじけれど、あだなる御心は、慰むやなど心見給ふことも、やうやうありけり。かの殿は、かく取りもちて、なにやかやと思して、残りの人々をはぐくませ給ひても、なほいふかひなき事を、忘れ難く思す。

(蜻蛉・311)

さすがに、匂宮の「あだなる御心は……」と評するほどの変化はあったけれど、薫・匂宮ともに、浮舟追悼の心は深く、嘆き勝ちに過ぎていると言つて良いかと思ひます。

要するに、蜻蛉巻前半までは、浮舟巻の入水を受けて、薫・匂宮における後日談とも言うべき内容を、よく語り続けていると言つて良いかと思ひます。それが、不審に思われるような屈折をするのが、蜻蛉巻後半の叙述であります。蜻蛉巻

後半は、明石中宮の法華八講の法会の描写に始まりますが、几張の隙間から図らずも覗き見た、夏の氷を手にして微笑む女一宮の姿に、薫が思わず心を捉えられるという記述がなされます。女一宮は、薫の正妻女二宮の姉にあたりますが、恋しい感情のままに、妻である女二宮に氷りを持たせて、昨日見た女一宮の姿を忍び、恋心を紛らわすという場面があります。母である明石中宮の邸で匂宮と出会うと、姉弟の血縁ということもあり、女二宮と似通う匂宮の姿を見て、

まづこひしきを、いとあるまじき事としづむるぞ、たゞなりしよりは苦しき。

(蜻蛉・318)

と、女一宮に寄せる、苦衷の思いを語っています。そして、ついには、姉妹二人の宮を、

わが宿世は、いとやむごとなし。まして、並べて持ちたてまつらば、

(蜻蛉・333)

などという夢想までも抱きます。

一方匂宮も、式部卿の娘が、母の明石中宮のもとに、宮の君と呼ばれる女房として出仕することになると、式部卿と浮舟の父八宮とが兄弟であることを機縁として、宮の君に、そぞろ関心を寄せ始めます。

蜻蛉巻を、前巻の浮舟入水を受けて、その追悼を語る巻と理解するなら、以前の御法巻に対する幻巻のように、物語の終末に向かう巻として説明も出来ませんが、この巻の後半に至って、薫および匂宮のあらたな恋心の始発が語られることになると、それらがなぜ語られるかという理由の説明に困ります。薫が、浮舟を巡って、かつて匂宮から受けた仕打ちを思い出し、

いかで、このわたりにも、珍しからむ人の、例の、心入れて、騒ぎ給はんを、語らひとりて、わが思ひしやうに、「安からず」とだにも、思はせたてまつらむ。まことに心ばせあらむ人は、わが方にぞ寄るべきや。

(蜻蛉・331)

と思うことはあります。しかし、浮舟物語における最後の問いかけの結果が、二人の貴公子の表面華やかにも見える恋愛生活を回復していくことの意味は、容易に理解しかねるものがあります。いろいろな推測の可能性があります。蜻蛉巻

後半の物語が、浮舟物語の後に存在する唯一の意味は、おそらく、薫・匂宮という拔群の貴公子においてさえも、そこに卓越した純粋性といったものを感じることに無意味、薫と匂宮に顕著に異なる人格性を感じることに無意味、それらが、それとなく、しかし、明瞭に語られていると認識することのほかは、理解のしようがないと思われます。言い換えますと、顕著に優秀な、顕著に価値ある人間性などというものは存在しない。どれを取ってみても、誰を比較してみても、現実の場における、そこそこの差という程度の区別はあっても、男としての、あるいは人間としての、本質的な差異は無い。作者の、諦観にも似た最後の思想が、物語場面として描かれている。蜻蛉巻後半を積極的な意味において理解しようとしたならば、それ以外の理解の仕方は無いと思われます。

手習巻以後においては、匂宮は、浮舟の思念のうちには登場することはありませんし、薫は、手習巻の終わりで浮舟の生存を知り、その後のいささかの行動が記述されます。薫が、浮舟の生存を知った時、彼は、

やがて亡せにし物と、思ひなしてをやみなん。……我が物に、とり返し見むの心は、又つかはじ。
(手習・412)

と思ひながら、一方でまた、

住むらむ山里は、いづこにかあらむ。いかにしてさま悪しからず、尋ね寄らむ。僧都に逢ひてこそは、たしかなる有様も、聞き合わせなどして、
(手習・413)

などと、はなはだ節操も無い態度で揺れています。

僧都を訪ねての後も、

罪軽めてものすなれば、いとよしと、心安くなん、身づからは、思ひ給へなりぬるを。母なる人なむ、いみじく恋ひ悲しぶなるを、……親子の中の思ひ絶えず、悲しびに堪えて、とぶらひ物しなどし侍りなんかし。
(夢浮橋・422)

など、「私自身は、尼となった浮舟の今の状態を好ましく思つて、今更心を乱すことはしないと思つているのだが、恋い悲

しんでいる母親には、消息を知らせてやりたい」と、繰り返して述べる。薫の使いとして浮舟のもとに向かう小君に対しても、「親の御思ひのいとほしさにこそ、かくも尋ぬれ」と言いながら、「母に、まだしきに言ふな」と口固めする。そして、実際に小君に託した薫の手紙には、

今はいかで、浅ましかりし世の夢語りをだにと急がるゝ心の、我ながらもどかしきになむ。
(夢浮橋・433)

と、自らの感情そのものであることを、明記しています。薫は、浮舟になにをしたいのでありましようか。恐らく、途中で挫折した「庇護」を、あらためてやり直すこと、人目に触れないようにひそかにやり直すことを、宇治から小野への浮舟の心の変化をなにもも顧慮することなく、ただ思考しているものと思われまます。ここには、宮廷生活に馴れた通常の貴公子としての薫、平均的な貴族としての薫の姿しか感じられないと思うのですが、いかがでありましようか。

三 横河の僧都

横川の僧都を、人情味のある、血の通った高德の僧とする見方が、一般的であるようですが、私には、そのように思えません。僧都が、最初に物語に登場した時、次のように語られておりました。

(母尼ガ)いたう患へば、横川に消息したり。山ごもりの本意深くて、「今年は出でじ」と思ひけれど、限りのさまなる親の、道の空にて亡くやならむとおどろきて、急ぎものし給へり。
(手習・339)

実のところ、僧たるべきものが、「山ごもりの本意深くて、今年は出でじ」と決意している時に、母親が重病であわやという状態で、「山ごもり」を守り切るべきであるのか、破つても母親のもとに駆けつけるべきなのか、横川の僧都が高徳の僧として質を保持しているなら、どう行動するのがそれらしいのか、にわかには判断はしにくいですけれども、宇治院の裏手の森のような木の根元で発見された浮舟にかかわり過ぎるところや、母尼が、小野の山荘に帰って遠道の名残でしばし

悩んだのが、やうやうよろしくなるまで見守っていたりするのは、「山ごもり」の意識の厳密さに、やや疑問符をつけたくなる所でもあります。

母親の死に近い病気のための山下りが、本当に特別の例かと認識していると、今度は、浮舟の病状になかなか好転の兆しが無いので、妹尼が、京都に出るのならともかく、この坂本あたりまで祈禱に下りて来て欲しいと、僧都に依頼すると、自分が見つけた因縁もあるから、最後まで面倒見てみようと言って、早速に下山するといったあたり、また、その後、一品の宮の物怪の祈禱のために、明石中宮に懇請されて簡単に承諾して宮中に参ったりするあたり、横川の僧都の山ごもりも、さほど厳密な意識は感じにくくなってしまっているのですが、どうでしょう。

さらについてですが、この一品宮の物怪の祈禱で参内した際に、女一宮に取り憑いた執念の強い物怪の話から、宇治院で発見した女性のことを、僧都は語り出します。明石中宮の気配を見て、僧都は「心もなき事、啓してけり」とは思いますが、「物よく言ふ僧都」で、その女性が小野の山荘で出家した事情までも語ってしまいます。僧都の軽率、不用意は明らかでありましょう。さらに、僧都自身が、その女性がひたすら身を隠す態度であることを知りながら、そのことを怪しく思っ中宮に申しあげているのだとは、なんたる詭弁。ここまで散々語っておいて、それで、やっと「なま隠す気色」であるとは、批評の余地も無い態度であります。このことで、浮舟の生存が伝えられて、浮舟の心情に動揺をもたらしたり、ということに繋がっていきます。横川僧都のどこに、「高德の僧」のイメージがあるのか、私には不思議でなりません。

浮舟の出家について言えば、妹尼が再度の初瀬詣に出かけて留守であった時の、浮舟の出家への懇請に対して、僧都は、

「まだ、いと、行く末遠げなる御程に、いかでか、ひたみちに、しかは思したゝむ。かへりて罪ある事なり。思ひ立

ちて、心を起こし給ふ程は、強く思せど、年月経れば、女の御身と言ふもの、いと怠々しきものになむ。」

(手習・387)

と、説得を試みます。それに対して、出家はかねての念願でもあり、病状も死に近いことを感じているのでというふう
に、浮舟が再度の懇願をしますと、僧都も、

「とまれかくまれ、思し立ちての給ふを、三宝の、いと、かしこく褒め給ふ事なり。法師にて、聞え返すべきことに
あらず。」

(手習・388)

として、承諾することになります。初瀬参籠から帰ってきた妹尼の恨み言に対しても、「老いたる、若き、定めなき世なり」
というように、世の無常を説いて、かえって妹尼の感情をたしなめます。

ここら辺の態度や発言には、高德の僧といった印象は十分と感じ取れると思いますが、浮舟の生存を聞きつけて横川
に訪ねてきた薫の言葉を聞いた途端に、

法師と言ひながら、心もなく、たちまちに、かたちをやつしける事と、胸つぶれて、答へ聞えんやう、思ひまはさる。

(夢浮橋・418)

というのは、あまりにだらしなく、以前の発言と、前後矛盾はなほだしいものがあると思われます。相手が妹尼であるか、
薫であるかということで、相手次第で態度がまるで反対になってきます。貴公子薫が横川を訪ねただけで、「もて騒ぎきこ
え」、浮舟が薫にかかわりのある人であったと聞いて、途端に「胸つぶれ」たりして、権威の前に周章狼狽する姿が、露わ
であります。さらに、浮舟の存在は、すでに薫に隠しようが無いと判断すると、宇治院で浮舟が発見された時も、「自分は
母親の病気にかかりきりで浮舟のことは弟子の僧たちにまかせきりであった」とか、「浮舟が薫にかかわりのある女性とは
全く知らなかった(知っていたら、出家させたりは決してさせなかった)」とかいう発言に至っては、なにをか言わんやと

いう気持ちになります。そしてまた、薫に浮舟への消息を依頼されると、発心して出家した浮舟の心を乱すことについて、自分だけが「このしるべにて、かならず罪得侍りなむ」ということであつて、薫の今後の行動には「何の咎か侍らん」と述べています。要するに、罪は自分がかぶるので、薫の行動には何の問題も無いと、ご機嫌を取っているのであります。権威に弱く、責任逃れに汲々としている小役人といった風情しか、私には感じられないのですが、どうでしょうか。

源氏物語終末の問題として、つねに取りあげられる問題ですが、

御心ざし深かりける御中をそむき給ひて、怪しき山賤の中に過ごし給へること。かへりては、佛の責め、添ふべき事なるをなん、うけたまはり、驚き侍る。いかゞはせむ。もとの御契り過ち給はで、愛執の罪を晴るかし聞え給ひて、一日の出家の功德、はかりなきものなれば、なほ頼ませ給へ。
(夢浮橋・428)

という、僧都の消息の問題。還俗説・非還俗説と議論があつたようですけれど、この文面を見るかぎり、還俗の勧めであることに、疑問の余地は無いと思われます。薫との愛情関係を無視しての出家、身分卑しい尼たちに混じつての出家生活、それらは、健気に恩愛の情を断ち、ひっそりと求道の道を実践するという意味で、むしろ褒められてよい出家の態度ですが、それらを何の説明も無く否定し、さらに、一端出家の功德は多大なものがあるから、安心して、薫とかかわるもとの生活に戻りなさいとは、なんたる欺瞞とは思われないうか。愛執の罪に悩んでいるのは、浮舟ではなく、薫であります。こんなことを言われたら、他人に憎まれ嫌われて、この世に存在していることを嫌悪されている人しか、出家も出来ないうことになってしまいます。

僧都の消息に還俗の内容をどうしても認めたくないという立場の方々もおられたようですが、消息文面の内容は、あまりに明白であります。非還俗説の立場の方々には、「高德の僧」横川僧都というイメージが絶対であり、横川僧都ほどの「高德の僧」が、そんなあやふやな仏教者である「咎が無い」という感情が前提であつたようですが、横川僧都を述べて

きたような、権威に諂う凡僧と見れば、なんの疑問も残らない問題ではないかと思われまます。

四 中将

横川僧都の妹の尼君が、もとは上達部の北の方というほどの身分であつて、夫が亡くなった後に、残された一人娘を愛育していたことは、語られていました。その一人娘も、母親に先立ってしまったということがあつて、世をはかなんで出家し、小野の山荘でひっそりと、尼としての生活を営んでいたことも、語られていました。その死別した娘の夫であつた青年、今は、中将となつて、いっぱしの立場になつてゐる婿であつた人物が、物語に登場します。兄弟の一人が、横川僧都のもとに弟子として入つており、それを訪ねて横川に赴こうとする途中、山道の入り口近くにある山荘に、立ち寄つたというものであります。中将は、勿論、この山荘に、浮舟のようなら若い女性がゐるなどとは、夢にも思つていなくて、義理の挨拶でもしてというところだったので、雨が降り始めたために少し足止めされ、その時に、簾の隙間から、思いがけない若い女性の姿を見てしまいます。思いがけないこんな田舎の山荘にということと、そんな場所に不似合いな美しさということもあつて、中将は、突然の好奇心を抱いて、知り合いであつた尼に、事情を尋ねます。雨が上がつて出て行く時に、庭の女郎花を手折つて、

「なに匂ふらむ」

(手習・365)

と口ずさむあたり、彼が突然に抱いた関心を、それとなく尼君たち、できたら浮舟にも知らせておくといった態度がすでに明らかであります。

横川からの帰途、中将は、山荘に立ち寄り、前日にかいま見た女性のことを、妹尼に尋ね、あらためて浮舟本人に意志を伝えます。

あだし野の風になびく女郎花われしめゆはむ道遠くとも

(手習・368)

まさに「意志を伝えた」という表現にふさわしく、中将の気持としては、事情は深くは知らないけれど、「私こそが、あなたに救いの手を差し伸べてあげましょう」という申し出は、不本意に侘びしい山中の生活を余儀なくされている娘にとつて、どれほどに安堵と感謝の言葉になるか、という感覚があります。薄幸のシンデレラのために、王子の役目を引き受けてやろうというような、慈善の意識さえもあつたと思われます。ところが、この薄幸の姫君は、案に相違して、返事の和歌を詠むことも出来ません。和歌を詠むという程度の技も身につけていないのか、なにかの事情があつて、返歌することは躊躇されるのか、あるいは、気持はあつても恥ずかしくて、すぐに行動出来なくなっているのか、なんにせよ、昨日の今日という事柄なので、中将も、一応納得して、

こたみはさもありぬべしと思ひ許して、かへりぬ。

(手習・369)

ということになります。

浮舟と中将の最初の出会いに知られることは、浮舟の素性を知らないからだと言えはそれまでのことではありませんが、中将の、あまりの思い上がりの意識です。いや、「思いあがり」と言うのは、適当で無いかも知れませんが。近衛の中将と言えば、名門貴族の貴公子が任官する官職で、この後、蔵人頭などを経て公卿の列に入る、洋々たる前途を見渡せる立場でもあります。これは、現在、藤中納言の婿に迎えられたりしていても、それにも満足せず、「親の殿がち」にいるといった、中将の意識にも知られます。私的な立場においても、かつての光源氏や頭中将の若い頃のように、どのような恋愛も不可ならざるは無いといったところが、彼の通常の意識であつたと思われます。その彼が、鄙びた山中で思いがけなく見たせいか、突然の愛着を感じて、「今後は、私がきちんとお世話してあげましょう」と言う申し出は、明日の生活にも事欠いている放浪の女性にとって、天佑と言ってよいほどに幸運な出会いであつたというのは、客観的には、自然な事実認識

であったと思われれます。

従つて、その後、小鷹狩の口実を作つて、再度小野の山荘を訪れた時には、中将には、その後、多少の途絶えがあつて申し訳ないと言つたほどの、気持であつたであらうとさえ思われれます。訪問すると、早速に、

「一目見しより、静心なくてなん」

(手習・369)

と申し入れますが、事柄は、案外に進捗しません。中将は、

「いづら。あな心憂。秋を契れるは、すかし給ふにこそありけれ」

(手習・371)

とまで言います。妹尼も含め、山荘全体が、中将への期待と願望に包まれて、中将も、新婚初夜という気持で訪問したのに、娘の意外な抵抗は、中将には、不思議なものに感じられたようなものでありました。

いたう、好きがましからむも、さすがに便なし。いとほのかに見えしさまの、目とまりしばかりに、つれづれなる心慰めに、思ひ出でつるを、あまりもて離れ、奥深なるけはひも、所の様に合はず、すさまじと思へば、帰りなむとす
るを、

(手習・373)

「なにを勿体ぶつて。都のお姫様でもあるまいし」というのが中将の感覚で、「つれづれなる心慰めに、付き合つてやろうかと思つたけれど、その気持も失せかけた」というのが、正直な感情であります。

興味を失つて帰りかけた中将を引き留めた妹尼の気持に対して、あの娘に事情をのみこませて応対するようにしてくれるなら、私も、これで断絶する訳でもないというような書信を、中将は寄越します。その後、中将は、もう一度山荘を訪ねます。妹尼が初瀬詣に出て浮舟が一人残つているところで、中将は、強姦同様にも、浮舟を所有したいという行動であつたと思いますが、浮舟は、母尼などのいる奥の部屋に逃げ込んで難を逃れます。浮舟が出家したのは、その直後ですが、浮舟の出家を聞いた後も、中将は、もう一度山荘を訪ね、尼となつた浮舟の姿の美しさを見て、せめて「はらからと

思ひなせ」と言うように、諦め切れない感情を訴えますが、浮舟の心情にはまったく無縁であります。

中将と浮舟の物語は、述べたようなものでありますが、ここに知られるのは、最初から最後まで、終始、浮舟と無縁の物語であったということでもあります。中将は、勝手に思いがけない興味を感じ、勝手に浮舟を簡単に所有できるように思い込み、勝手に案外な抵抗に生意気なと思ひ、思いがけない挫折に驚き、最後に浮舟の姿を見て、あらためて残念で悔しい思いを持ったという、まったく中将の一人勝手な物語であります。浮舟の心に、なんの動揺も刺激も与えないこのような物語が、なぜ浮舟物語の終末に語られるのか。浮舟の求道というところに視点を置いて考えるなら、現世からの誘惑には、すでに微塵も心を動かすことも無い浮舟の仏心の再確認といった理解も可能であります。次節に述べますように、私は、浮舟の求道心も本来の純粹とは違うという認識をいたしております。となれば、中将の物語は、いったいどのような意味のものでありましょうか。立場から言ったら不遜な思い上がりも、さほどに不自然でなかった、逆に言うと、事情もよくは知らなかった貴公子中将の、そのかぎりでは自然であった好奇心と当然の挫折の経緯が、浮舟の周辺に起きた一つの事件として語られていた、そういう物語であったということ、今は、述べておきたいと思ひます。

五 浮舟

浮舟が、入水の後、自らの思いを述べたのは、小野の山荘に移った後、横川僧都の修法によって物怪が退散し、やっと自意識が回復した時で、初めて発した言葉が、

「尼になし給ひてよ。さてのみなむ、生くやうもあるべき」

というものであります。思わぬ蘇生によつて、「死」が叶わなかった時、これからもそれが望めないとしたら、出家して尼になること、それだけが生きる道だと言ひます。要するに、浮舟にとっては、生きながらも現世との関わりを断つ

という状態になれるという意味で、出家が、死と同じ価値を持つことになるのであります。浮舟は妹尼に訴えます。

「世の中に、なほありけりと、いかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いといみじうこそ」とて、泣い給ふ。

(手習・358)

浮舟にとっては、自分の生存が知られること、そのことによつて(過去あるいは将来の)現世のかかわりが復活してくること、そのことがなによりの問題であつて、敢えて言えば、出家が叶うかどうか、絶対的な問題というものではない。分かり易く言うと、出家のことが完全に実行されてさえいれば、薫や匂宮に自分の生存が知られたり、場合によれば、尼姿のまま、彼らと懐旧の対談をしたりすることにも特別な抵抗感はない、ということでは無い。もう一度、別の言い方をしますと、仏の道に入ることよりも、薫や匂宮との説明にも窮する関係に、なんらかの態度をしめさなければならなくなるという状態を、かぎりなく畏怖し困惑している、そういう問題であつたと思われまふ。

浮舟が、意識を回復して後の、最初の事件が、中將との出会いでしたけれど、これが、完全に中將の一方的な感情の物語であつて、ここに、浮舟の感情がいささかも関わるところがなかつたということは、前節で述べました。浮舟は、中將の一方的な感情の物語において、求道の心を、いささかも深くもまた薄くもすることはありません。中將の接近と出家への願望は、浮舟にとつて、まったく別の問題であります。浮舟の出家への動揺する感情が、中將の接近によつて、確固としたものに形成されていったなどという認識は、まったくの誤解であります。浮舟にとつての中將の問題は、浮舟にとつて死以上につらい問題、薫・匂宮に直面するという絶対に現実にしてはならない状態に、さらに説明しようも無い要素を加える問題でありますから、二〇〇パーセント成立の可能性の無い問題であつた訳であります。

浮舟にとつては、薫・匂宮にかかわる世界、すなわち現世との離脱の感情は、最後までゆらぐことはありませんでした。それは、還俗説・非還俗説の議論の端緒となつた、例の横川僧都の消息に対しても、妹尼に、

「僻事なりけりと、聞えなして、もてかくし給へ」

(夢浮橋・431)

と言いつつておりますし、小君が持つて来た薫の文に対しても、

「所違へにもあらむに、いとかたはら痛かるべし」

(夢浮橋・434)

と、返しております。見守っている妹尼にさえ、浮舟の虚偽が見え見えであるにもかかわらず、それでも、自分の生存を絶対に認めないという態度だけは、どんなことがあつても死守していることでも分かります。彼女にとっては、絶対に現実になつてはならない問題なのであります。

従いまして、還俗とか非還俗とか、そんなことはさしたる問題ではありません。横川僧都の消息は、確かに浮舟に還俗を勧めたものではありませんが、浮舟がそれに従うはずがありません。浮舟にとっては、還俗・非還俗自体は、問題の本質ではない。生きながら、現世とのかかわりを消滅させてくれるもの、それが出家という状態なので、それはなにを措いても死守する、ただそれだけのことであります。

繰り返しますけれど、薫・匂宮にかかわつた恥辱の過去、それは、今では、

やうやう身の憂さをも、慰めつべき際に、浅ましう、もてそこなひたる身を、思ひて行けば、宮を、少しもあはれと思ひ聞えけむ心ぞ、いと怪しからぬ。たゞ、この人の御ゆかりに、さすらへぬるぞと思へば、小島の色をためしに契り給ひしを、などをかしと思ひ聞えけむと、こよなく飽きにたる心地す。はじめより、薄きながらも、のどやかに物し給ひし人は、この折、かの折など思ひいづるぞ、こよなかりける。

(手習・383)

と、迷ふことのない感情になつている。だから、もう一度現世にかかわることがあつたらとは、浮舟は思わない。思わない理由が、浮舟が、来世の救いを願うという真実の心を得たからというのは、美談に過ぎます。本当の理由は、不本意ながらも、薫・匂宮という二人の男性と交流を持ったという、自らの人格に対する恥辱の思いであり、現世にかかわるなら

ば、その恥辱に立ち向かいながら生きる方途を見出していかなければならないということへの、当惑と混乱と煩悶にあります。

これはもちろん、浮舟に対して、すこぶる厳しい批評であります。浮舟の状況に置かれた時、入水によってしか解決の途を見出せなかった、素直で正直な娘に対して、厳し過ぎる批評であります。逆に言うと、浮舟入水後の物語は、素直で正直な娘が、自分なりに必死な形で、生きる道を探っていた物語と、言えるだろうと思います。再度、別に言い直しますと、特別に賢明でも愚かでもない娘が、生きながら現実から離れ得る立場としての出家、自分が支えられて生きていく形はそれしか無いと、わき目もふらずひたすら縋っている物語と、言うことが出来るかと思えます。

六 源氏物語終末の思想

浮舟が宇治川に入水し、さらに蘇生して比叡山麓の山荘に住む物語において、その物語を構成する人物を見ていく時、そこには、超人的な資質と能力を持つ人は、一人として存在していない。各節に述べたことを再述することは控えますが、本発表においては、そのことの説明を、懸命に努めたつもりであります。浮舟においてのみは、いま少し触れますと、彼女が、今では匂宮をひたすら疎ましく思い、薫の誠実に今気付くといった覚醒の仕方にも問題があります。浮舟巻で、回答を出しかねた課題が、こんなに簡単な形で解決されたとは思えません。要するにこれは、素直に正直であった娘が、自分の感覚の範囲で出した回答であります。作者紫式部の思いが、ここに表出されているとは、とても考えられないと思えます。

浮舟も含めて、すべての登場人物が、特に優秀でもなく、特に愚かでもなく、起きてくる事件に対して、時に困惑もしながら、懸命に対応しながら生きている。これは、私たちの、平凡な人生そのものの姿であります。結局のところ紫式部

は、物語とはなにかという命題に対して、平凡な人間が、平凡ながら懸命に生きている姿、それを描くものが物語であるという、彼女なりの最後の結論を見出したのではないかと、思います。少し中身は違いますが、後に坪内逍遙が『小説神髓』で説いた近代小説論に似たものを、紫式部は、長い実践の後に見出したのではなかったか、というのが私の結論であります。

従いまして、浮舟が還俗するかしないかとか、夢浮橋巻の終末が終末になり得ているかどうかなどの議論は、ほとんど何の意味もありません。もし、『源氏物語』がこの後も書き続けられるとしたら、嬉しいばかりでも、悲しいばかりでも、寂しいばかりでもないこの人生を、懸命に生きている人間たちの姿が、同じ人生を生きている人間同士の、思いやりの視線のなかで描かれていく、ただそういう物語であったであろうと、私には思われるのであります。ご静聴、ありがとうございます。

(本学教授)